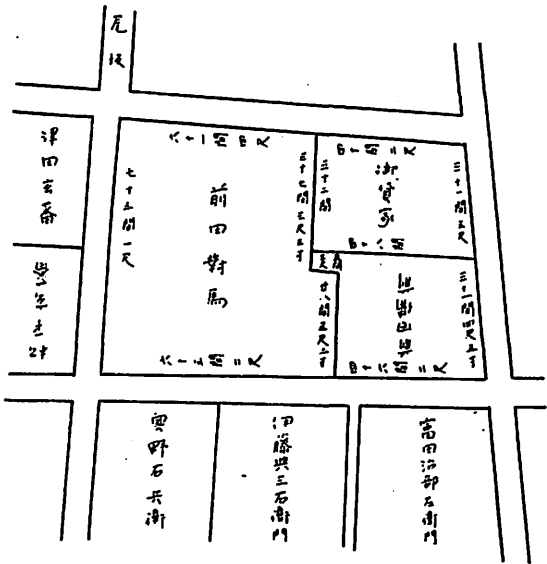


直知の父對馬守長種は、天正十三年利長卿越中射水郡守山へ入城し給ふ頃富山へ隨從、同五年より加州小松の城を守護し、二代美作直知、三代對馬直正、四代佐渡孝貞相繼ぎて小松城を守りける處、寛永十六年利常卿小松を養老城と見定められしゆゑ金澤へ搬宅すと、三州志にいへり。然れば大手先の第宅は、寛永十六年以來居住せし如くに聞ゆ。延寶の金澤圖に、前田對馬前口六十一間四尺とありて、西の方隣地前口四十間二尺御貸屋、其の後、地は前田備前とあり。然るに後に右御貸屋及び前田備前の第地も賜はりて、一圍の第地とはなしたり。明治慶藩の後前田氏等皆邸宅を賣却し、悉く町家となし、地内にまた一町を建て、明治三年七月町名を梅本町とす。

三州志來因概覽附録に云ふ。尾坂下前田伊勢守第内西方は、貞享の頃までは貸小屋あり。按するに、此の地梅窓院殿寛永四年入興の時賜地となるか。頭註に云ふ。此の地又前田備前の居第たるが、此の入興につき備前今の圖書第へ轉地し、其の跡對馬孝行圍中となし、梅窓院殿卒去後孝行へ賜之と云ふ。今圖書第地は一柳監物御預の節の第跡なり

延寶金澤圖



といへり。平次按するに、梅窓院殿は綱紀卿第三女にて、寛永四年四月廿六日前田對馬守孝資の室となり、享保三年十月五日三十二歳にて卒去也。

○前田對馬守長種傳

前田譜を按するに、其の祖先以來尾張國の地侍にて、愛智郡前田城に居住し、世々前田氏を稱す。青地禮幹の本藩略譜に、小瀬甫庵曰、尾州前田氏者皆藤原姓也、其系出於利仁將軍云々。然則前田長種等乃藤原姓也。とあり。長種の父與十郎長宗は、初め足利家に隨從し、後信長公に奉仕す。天正十二年秀吉公と織田信雄、徳川家康と隙ある時、瀧川一益は秀吉公の扶持を受け、伊勢國木造の城を守る。佐久間陵河守正勝は信雄の命を受け、尾張國蟹江城を守る。正勝同國萱生の地に城を築かんと欲し、彼の地に趣き、與十郎長宗をして蟹江城を守らしめける處、瀧川一益と親族たるに依つて、共に蟹江に籠城す。然るに信雄、家康大軍を以て蟹江城を圍み攻むる事甚だ急なりけるに、一益俄に變心し、長宗は罽守して木戸際に戦死す。于時長種は前田城を守り必死の處、遂に抜をなし、尾州を退き加州に來り、

利家卿に奉仕し一萬石を賜はり、七尾の城代を命ぜられ、翌十三年利家卿の長女を嫁娶せしめ、彈と成り、利長卿越中守山へ入城の時、後見となし附けられ、後守山の城代を命ぜられ、二千石加恩、慶長二年富山へ移城の時、富山へ隨從し、同四年金澤入城し給ふにより、富山の城代と成り三千石加恩せられ、翌五年より小松城を守り、同十年利常卿金澤に入城し給ふに依つて、小松城代を命ぜられ、五千石加恩ありて二萬石を領す。寛永年中致仕し、剃髮して源峰と稱し、同八年三月十一日小松に卒す。享年八十二歳。三州志に云ふ。寛永四年土籍隱居中に源峰見なされば、寛永五年に致仕するかといへり。又青地禮幹の本藩略譜には、長種幼字與十郎、又稱甚七郎、初事織田公。住尾州前田。後住蟹江城。任對馬守。と載せられたり。右は父與十郎長宗の事と混誤せしものなるべし。但し任對馬守といふ事は、陽廣公の命に依つて横山山城守長知へ尋問せし求舊紀談に、利長様御家老諸大夫前田對馬守、青山佐渡守、片山伊賀守、太田但馬守、此の四人諸大夫に被仰付由、山城申候とあり。淺野茂枝が説にも、前田對馬守は、文祿三年の前田守